

日本語の「場所格交替」の全体効果はどのように生じるか

麗澤大学 杉浦滋子

要旨

英語などにおいては自動詞・他動詞が場所格交替をし、全体効果が見られるが、日本語の場所主語を取る自動詞は単純動詞、「～かえる」を第二要素とする複合動詞どちらにおいても語彙的意味に全体への影響があることを含む。他動詞には単純動詞が語彙的意味により、あるいは文脈の意味により場所格交替を起こすものと、「～つめる」を第二要素とする複合動詞が自動詞である英語の *swarm* 動詞と同じ「多くの小さい要素が場所全体に分布する」という意味を表す。

1. 場所格交替

同じ動詞を用いながら、一方で場所を表す句として現れる要素が他方で主語あるいは目的語として現れ、合わせて前者で主語あるいは目的語として現れる要素が後者で「格下げ」された形で現れる場所格交替が様々な言語で指摘されている。よく知られる英語で例示すると、(1a)と(1b)、(2a)と(2b)の文は意味が非常に近いが、場所を表す要素が自動詞の主語として現れる(1b)、他動詞の目的語として現れる(2b)では(1a)(1b)と違い、場所全体に関わる意味が表される(全体効果)。

(1)a. Bees swarmed in the garden. (蜂が庭で群れていた)

b. The garden swarmed with bees. (庭いっぱいには蜂が群れていた)

(2)a. They sprayed paint onto the wall. (彼らはペンキを壁にスプレーした)

b. They sprayed the wall with paint. (彼らは壁全体にペンキをスプレーした)

日本語でも次のように同じ動詞を用いながら場所が「に」によって格表示される場合と自動詞の主語、他動詞の目的語として現れる場合がある。しかし、(4b)には(4a)にはない全体的な意味があるが、(3a)(3b)には違いがない。以下に日本語の自動詞、他動詞を見ていく。

(3)a. 駅に帰宅困難者が溢れていた。

b. 駅が帰宅困難者で溢れていた。

(4)a. 壁にペンキを塗った。

b. 壁をペンキで塗った。

2.自動詞

日本語での研究を自動詞についてみると、英語に比べて生産性が低いことが指摘されており、場所格交替を示すものとして次のものが挙げられている（森川 2018）。

(3)光る、輝く

満ちる、一杯になる／である、溢れる、つかえる、詰まる、渋滞する、散らかる、にじむ

Levin(1993)が英語で動詞を詳細に分析しており、自動詞で場所格交替を示すものを次のように意味的に分類している。

(4)光の発生を表す動詞:beam, glow, sparkle など

音の発生を表す動詞:buzz, hiss, shriek など

物質の噴出を表す動詞:drip, foam, ooze など

音の存在を表す動詞:echo, resound, reverberate など

個体特有の存在の仕方を表す動詞:bloom, blossom, sprout など

動きに関わる存在の仕方を表す動詞:dance, quiver, tremble など

swarm 動詞:abound, bustle, crawl, creep, hop, run, swarm, swim, teem, throng

最後の swarm 動詞だけは意味的性格付けがされていないが、swarm 動詞として挙げられた例を見ると abound 「豊富に存在する」以外は小さい生物が群れたりうごめくことを表す動詞となっている。

日本語の動詞で光の発生を表す動詞では実際場所格交替があるかどうか不明なので除いて考える。

(5)a. The sky shone with stars.

b. *空は星で {光っていた/輝いていた}。

それらを除くと日本語の自動詞で場所格交替が見られるのは「満ちる」こと、つまり全体が影響を受けていることを表すものと、「つかえる」「詰まる」「渋滞する」「散らかる」という「その場所全体に影響があり、使えなくなる」ことを表すものに限られる。とすると、英語のような言語では場所を表す要素が主語位置に現れることによって全体効果が生じるが、日本語では全体が影響を受けるという意味をもつ動詞のみで場所格交替が起こることになる。言い換えると、英語のような言語では構文によって全体効果が生じるが、日本語では自動詞に全体的な意味がある場合にのみ場所主語が許容される。

そして、自動詞に全体的な意味がない場合に語形成によってそれが付け加えられることが可能である。日本語には複合動詞の第二要素となる「～かえる」という要素があり、意味の強調とされる。

- (6)a. 私たちはあきれかえった。／私たちはあきれた。
b. 叱られてしょげかえっている。／叱られてしょげている。
c. 部屋には使わない物があふれかえっている。／部屋には使わない物があふれている。

上記の例では「～かえる」がつかない形式も同じように用いられるが、次のように語彙化した形式にも「極度に、極限までに」という意味が含まれる。

- (7)a. 偉そうにふんぞりかえっている。／*偉そうにふんぞっている。
b. 腸が煮えくりかえった。／*腸が煮えくった。

「あふれる」は(3)で見るように場所格交替があるが、「あふれかえる」も同様に振る舞う。

- (8)a. 駅に帰宅困難者が溢れかえっていた。
b. 駅が帰宅困難者で溢れかえっていた。

「～かえる」を第二要素とする複合動詞が場所主語のみを許容する場合もある。「静まる」と「静まりかえる」では、前者は場所主語を選択せず、後者は場所主語のみを選択する。

- (9)a. 観客は静まった。
b. 観客は静まり返った。
(10)a. *教会は静まっていた。
b. 教会は静まり返っていた。

また、「むせる」の主語は人間のみだが、「むせかえる」は場所主語を選択する。「～かえる」が全体に影響が及ぶという意味をもつため場所主語を選択する項構造をもつと考えられる。

- (11)a. 会場はファンの熱気でむせかえっていた。
b. *会場はファンの熱気でむせていた。

つまり「～かえる」は強調というより「極限まで」という意味をもっていて、それが場所

に関しては全体に及ぶことを意味し、その結果場所主語をも、あるいは場所主語のみが許容されると考えられる。

なお、「～まくる」「～たおす」など、強調の意味をもつ要素はほかにもあるが、これらは「～かえる」と異なり、「あきれる」「しょげる」「むせる」のような非対格自動詞ではなく「書く」「謝る」のような非能格自動詞と語形成する。そのため場所主語をとる複合動詞を形成することができないと説明できる。

日本語でも同じ自動詞が場所格交替によって異なる意味をもつように見えるものを見よう。(12)(13)では場所が主語である場合には「場所全体に要素が分布するため不都合が生じている」という意味があり、その意味に合わない文脈で場所主語が不適切となるように思われる。だとすると場所格交替によって「不都合効果」が生まれていることになる。

(12)a. 落ち葉が樋に詰まっている。

b. 樋が落ち葉で詰まっている。

(13)a. エクレアにチョコクリームが詰まっている。

b. *エクレアがチョコクリームで詰まっている。

しかし、(12)の「詰まる」と(13)の「詰まる」は同じではない。(12)の「詰まる」では場所は経路であり、物がそこに存在することにより経路として使えなくなるという意味をもつが、(13)の「詰まる」では場所は経路ではなく容器である。場所が容器である場合には(14)のようにそこに物が存在することが不都合であっても場所主語は容認されない。つまりそれぞれの動詞が「場所」というだけでなく「経路」「容器」を意味的に選択する別の動詞であるため、場所が主語である場合とそうでない場合で異なる意味合いが生じるわけではない。そして、経路として使えなくなるという意味の(12)の「詰まる」のみが場所格交替をする。

(14)a. * (生クリームも入れたいのに) エクレアがチョコクリームで詰まっている。

b. * (ミネラルウォーターも送りたいのに) 段ボール箱が支援物資で詰まっている。

3.他動詞

「塗る」「飾る」などが日本語で場所格交替をする他動詞として挙げられている。しかし、(15)(16)を(4)と比較すると「塗る」が場所目的語を許容するのは「場所目的語全体が影響を受ける」場合ではなく、「場所目的語の外見が変わる」場合である。日本語では行為全体の中に二つの要素があり、どちらも行為の主な対象と見なしうる文脈で起こると考えられる。「壁にペンキを塗る」という行為において壁全体が変化するなら「ペンキ」に加え「壁」も主な対象となりうる。しかし、「パンにバターを塗る」「肌に日焼け止めを塗る」

る」という行為においては「パン」「肌」が主な対象となるような変化をせず、主な対象と見なされないために場所格交替をしない。

(15)a. パンにバターを塗った。

b. *パンをバターで塗った。

(16)a. 肌に日焼け止めを塗った。

b. *肌を日焼け止めで塗った。

それに対し「飾る」の場合は動詞の語彙的意味の中に「場所の外見が変わる」が含まれており、場所と要素のどちらもが主な対象となることができる。

(17)a. 部屋に花を飾った。

b. 部屋を花で飾った。

しかし、「塗る」と「飾る」では違いがある。通常の文脈で場所と要素のどちらかのみが「を」格で現れる場合には「塗る」では場所、「飾る」では要素が選択される。(Pinker 1989 の言う content-based か container-based かという区別である。)

(18)a. ?彼はペンキを塗った。

b. 彼は壁を塗った。

(19)a. 彼は花を飾った。

b. ?彼は部屋を飾った。

そしてどちらにも「～つける」を第二要素とする複合動詞があるが、「塗りつける」は要素、「飾りつける」は場所を「を」格表示する。単純な動詞が無標の対象 (content-based な動詞であれば要素、container-based であれば場所) を目的語として選択するのに対し、複合動詞は有標の対象を目的語として選択すると説明できる。

(20)a. 壁にペンキを塗りつけた。

b. *壁をペンキで塗りつけた。

(21)a. *部屋に花を飾りつけた。

b. 部屋を花で飾りつけた。

それに対し、「～つめる」は(22)(23)のように「極限まで」という意味をもち、「～かえる」が自動詞で場所主語を可能とするのと同じように、他動複合動詞の第二要素である場合場所目的語を選択することを可能とする(Kishimoto 2001)。

(22)道場に通った。／道場に通いつめた。

(23)トップの座に登った。／トップの座に登りつめた。

(24)a. 床にタイルを敷いた。

b. 床にタイルを敷き詰めた。

(25)a. *タイルで床を敷いた。

b. タイルで床を敷き詰めた。

Kishimoto (2001) は「～つめる」をアスペクチュアルな意味をもつ補文をとる要素とするが、(25b)と(26b)を比較するとわかるように、「～つめる」は「多くの小さい要素が場所全体に分布する」という意味を加える。これは(4)の **swarm** 動詞に共通に見られる意味である。そのため、「～つめる」は「完了」のような一般的なアスペクチュアルの意味を表しているのではなく、場所が文の中でより中心的な意味をもつことを可能にするきわめて限定的なものである。

(26)a. 床に大きなじゅうたんを敷き詰めた。

b. *大きなじゅうたんで床を敷き詰めた。

日本語の他動詞では「飾る」、そして場所の外見が変わる場合の「塗る」などが場所格交替を見せる。そして、英語の **swarm** 動詞で場所が主語となるときに見られる意味が複合動詞「敷き詰める」に見られることから、動詞の語彙的意味によって場所目的語が許容されることを見た。

4.心理の表現

場所格交替する動詞の中には、次のような心理の表現も含まれる。この場合の場所は顔や目となる。

(27)a. Excitement danced in his eyes. (興奮が彼の目の中できらめいていた)

b. His eyes danced with excitement. (彼の目は興奮できらきらしていた)

(28)a. Mischief sparkled in her eyes.

b. Her eyes sparkled with mischief. (彼女の目がいたずらっぽく輝いた。)

日本語で類似の表現は場所主語のみを許容し、かつ感情の標識には「で」でなく「に」が選択される。同じ「あふれる」という動詞が用いられていても(3b)とは異なる格表示となる。このことから、要素が感情である場合の場所は特殊であると考えられる。

(29)a. 彼の声は自信 {に／*で} あふれていた。

b. *自信が彼の声にあふれていた。

(30)a. 彼女の態度は威厳 {に／*で} 満ちていた。

b. *威厳が彼女の態度に満ちていた。

5.まとめ

日本語の自動詞で場所格交替を示すものは動詞が全体的な意味をもつ。それに対し、他動詞には場所格交替で全体効果を見せるものと複合動詞となって場所目的語を許容するものがある。単純動詞で場所格交替をする動詞には **content-based** のものと **location-based** のものがあり、「～つける」を第二要素とする複合動詞は第一要素が **content-based** であれば場所目的語のみを選択する動詞、**location-based** であれば要素目的語のみを選択する動詞である。

英語で同じ動詞が自動詞、他動詞どちらも場所格交替で全体効果があるのに対し、日本語の自動詞、他動詞では動詞の語彙的意味に全体的な意味を含むものが単純動詞、複合動詞に見られた。しかし、他動詞においては「塗る」のように文脈の意味によって場所格交替をするものが見られる。他動詞にのみこのような動詞が見られることの説明が次の課題となる。

参考文献

伊東朱美(2015) 「日本語の移動変化動詞と場所格交替」 東京外国語大学留学生日本語教育センター論集 (Bulletin of Japanese Language Center for International Students) no.41 p.95 -105

Kishimoto, Hideki (2001) Locative alternation and verb compounding in Japanese. Proceedings of 7th Mediterranean Morphology Meeting.

Levin, Beth (1993) *English verb classes and alternations – A preliminary investigation*. University of Chicago Press.

Pinker, Steven (1989) *Learnability and cognition -- The acquisition of argument structure*. MIT Press.

森川文弘(2018) 「自動詞場所格交替に生じる動詞の日英比較」 姫路獨協大学外国語学部紀要 31:53-66